

Handwritten blue ink markings, possibly characters or symbols, located on the left page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located in the center crease area.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located in the center crease area.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located in the center crease area.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

Handwritten dark ink markings, possibly characters or symbols, located on the right page.

落穂集卷之六

一 家康公は三月下旬御帰府被施は處六月初に頃奥州南部大膳大丈信直親類家老より九戸修理トト者主人信直に對し逆意を企り九戸より一味乃族多々して信直奥に鎮せられたるの風耳あり依之奥に御登向之義可有之とる具用言意可仕旨は陳觸被仰也今度先手忠義に結城秀康公榭原康政と新お流旨は仰渡右南部表に義京都へも相耳へりれは秀吉卿より様子次第出勢ありき由り先尾に中納言秀次登向可有旨は出蒲生氏卿義に同困れ義此に先陳考る是に旨あり候に暇と給り支度乃たら會津へ下向や

氏郷へ加勢とて去り秀吉郷より浅野長政秀次より
堀尾吉晴は其差源を其二年へ有之に依り家康公
は之井伊直政とて氏郷加勢を被仰付り直政は早々
奥刃へ帰し家康公は七月十九日江戸に出馬せしが
とて氏郷は手勢二万以率り七月十四日會津と勢
あり浅野井伊堀尾加勢三人忠義は直に南部へ罷向ひ
心より九月朔日氏郷を先陣薄生源左門同志右衛門
九戸の穴太井此城を圍攻あり逆徒等城中より矢玉
放り大きに是を防くに依り源左門忠右衛門手忠
者数多戦死と蒙り其日同志兵衛とて氏郷騎備に節
付あり城兵等城より突出忠兵衛は備は切崩しと致は

幸と引請一人之不残是と取り取る九戸は一味たる根曾
利乃城兵穴太井忠城を救り為三百騎計に馳來
あり氏郷家中田丸中務とて其外門屋寺射
矢を每原新田上総とて云々も各懸て突立られ過半討れ
残兵等穴太井此城へ入ると幸に右忠者とも穴太井此城へ
やいりし此日井伊直政は氏郷と勇と争ひて軍功と足次
浅野源正堀尾帯刀八擲手へ押奇手痛く攻殺手は此
城兵悉く戦ひ死すと既して落城と見えぬも暁日
及りし依り四方忠奇手も勢を引揚翌日早天に城を
責めし及りしとて其日奇手忠諸將れ手へ捕り
忠首十余級に及りしと云々あり其夜中逆徒は賊將九

戸正直茂浅野長政陣に來り主人南戸信直茂本領安堵
可共仰付茂より降参侍り城以明渡し一戸こし長政
を諾しより依り賊兵等城を長政に渡す長政賊將正
直大掃引兩人以三丸へ呼出して米田兵以附置城兵数百
人ぞ矢倉へ上置必をうけ来心く焼殺す此節中納言
未乃次三丸より着陣れ処く浅野長政南部表靜謐れ功公
遂井伊直政相共に九戸掃引等以互連着陣志く穴太
井城責忠始終をト連し兩人降参れ老の茂い出言カ會
津へ巻し氏卿に預置て未乃吉卿乃御差図次第に可
ト行首おまを妙し未乃次被申以我等茂殿下忠名代也
志く下向れ上京都へ相伺す不及こ乃茂にく九戸掃引

兩人茂い三丸に於て成敗あり未乃次に
家康公へ由り
節奥及節れ制法以定免らましまし平泉と旋覽志て
帰陣あり 家康公にい若手沢より古河乃城へ馬とせり
入十月廿九日江戸へ帰陣陳被旋巻し其頃未乃次卿にい木村伊
勢守茂自分領知悉存しく参り一揆を退治侍り茂不罷
成と度不而と有て領地以取放ける伊達正宗一揆れ惡徒江
内通乃由其耳へりり依て本領と城志く木村跡高西
大崎へ移正宗の本領羽長井郡奥州郡村塩松伊達
信夫新田とん氏卿今度奥及一取々に於て軍功以廢表
こして是以給り干時正宗自分れ旧領米心く氏卿へ
加恩乃地志く相渡ふ以界に存且又其身一揆二味志

美之氏卿、新人に依てれ美ゆると且憤り且妬む右
旧領伊達信夫等れ所々に於て一揆を催し、氏卿を籠
ひ討つべし然るに政宗、家人山田八兵衛、千越内膳、戸西人
忠者も主人政宗に背き氏卿へ属して右乃企て告知せ
られ、氏卿時且不移人数を遣し悪徒乃張本と召捕へ
所々に於て殺害し、且も氏卿領分程を静謐致し、
少の事

一 同年三月廿八日、秀吉卿俄に園白職を罷免、中納言秀次
に譲り、其身の大同と号し、専ら朝鮮征伐を美敷
沙汰せり、且并城及小幡山に新城を築立、隱居所と可被
致す旨、其沙汰有之と申し

一 文録九年、春、秀吉卿、弥朝薨と征伐せしむるに、
美有、家康公に二月二日江戸御参駕、其庭榊原康政、
ハ市跡に残り、秀忠公に御用等取、且ハ仰付と
一 同月十九日、松平下野守忠吉卿、武以忍志城へ内移り、且
先、松平主殿頭家忠に、上総の園上伐、其城、其後
まゝ、同園小美川へ城地替被 仰付

一 同年三月十七日、家康公、京都より御出陣、其庭肥前國、右
護屋へ、下向乃、節伊達政宗上、叔景勝、佐竹美濃、南部
信濃等、其園、東大名乃、美有、家康公の御美園を請り
且、其根に、秀吉卿、其渡、市跡より、追之、其船、其後、
一 同廿六日、秀吉卿、京都より、其勢、其り

一 同年四月十日朝鮮國の先手として加藤主計頭清正
小西振津守行長名護屋を以て船して朝鮮へ渡海し
一 同年七月肥後國に於て薩長を任人梅北宮内大臣の
ト者清正行長西人此苗守と伺ひ一揆起は忠回名護屋
注進有之に有浅野大守幸長父彈正人数を以て連一揆
退治として肥後國へ可其旨亦吉崎節渡の刻 家康公へ
亦乃吉崎節渡の刻 家康公へ
務也其相添は及旨頼み節渡の忠勝も幸長と一所に発
向可有之乃支度是一揆一揆乃張本海北と誅罰して殘黨
悉く退散乃事注進有之に以て兩人加勢れ支相止ると
然るに京都に於て 大政取病氣大切乃トト來るは甘

て亦乃吉崎 家康公へ亦乃此節朝鮮征伐は最中は
ト以て慈母忠疾病も有格別れ事にも我事小船に
乗して早に能答る可も同朝鮮征伐事に於て其元
忠取討し任せ具万端可然様に頼む人如此申談の上は
何様忠重支たりも海路途に隔る間我々方への忠告
有及及び不も況や外人忠告のりも忠尋と有及は喜用は
置て其許忠心を以ては汝汰わると可給人浅野彈正
と始ら其不れ面を及も只今大納言殿へ我等ト談ト赴能
相心得可罷在に且述五拾挺立之同船に取乗上京は汝と
右 家康公へ亦直談節の事と侍へ取承面々扱は 家康公
此事を以て亦乃吉崎にも深く信仰は汝と有及は承知仕人

一 同年七月廿八日二部より於て大坂所赴去忠候江戸表(書)
有 秀忠公より江戸より江戸表に於て大坂所赴去忠候江戸表(書)

右の秀忠公候江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、
秀忠公候江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、
右の秀忠公候江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、

一 同年八月二日(書) 誕生表由大坂名護屋(江進)より江戸

秀忠公大坂に於て進出の月九、九、
家康村家より江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、
お弟は江戸に於て進出の月九、九、
と九持より江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、

帰洛の旨より江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、

家康公にも名護屋(江進)より江戸表(書)

以て水(中)より江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、

右の秀忠公候江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、

右名護屋(江進)より江戸表(書)

一 京都に於て進出の月九、九、

江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、

如く胡羅西より大坂に於て進出の月九、九、

大坂に於て進出の月九、九、

江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、

江戸表(書) 京都に於て進出の月九、九、

一 文祿二年三月六日秀吉伏見小幡守新地と取立渡御
其後と此弟河津法親守人吏第二下中伏見之弟集
其の旨は後化之今身に留るも河津法親守
信首善之のはりたにたてし心とも相立御座康政之人
法親人河津集の伏見城法親守有之志之國没亦弟河津
凡万貫有て人吏式更人少少も法親守の弟第二下中
伏見之上之段首法親守

一 同年二月七日秀吉在相見の所大坂と登御有 家康も
此の旨は秀吉吉相と出する野々登御有 家康も
家康も此の旨は秀吉吉相と出する野々登御有 家康も
此の旨は秀吉吉相と出する野々登御有 家康も

此の旨は秀吉吉相と出する野々登御有

一 同年九月秀吉在相見の所大坂と登御有 家康も
此の旨は秀吉吉相と出する野々登御有 家康も

一 文祿二年三月六日秀吉伏見小幡守新地と取立渡御
其後と此弟河津法親守人吏第二下中伏見之弟集

其の旨は後化之今身に留るも河津法親守

信首善之のはりたにたてし心とも相立御座康政之人

法親人河津集の伏見城法親守有之志之國没亦弟河津

凡万貫有て人吏式更人少少も法親守の弟第二下中

一 伏見之上之段首法親守

同年二月七日秀吉在相見の所大坂と登御有 家康も

此の旨は秀吉吉相と出する野々登御有 家康も

つねに中家より見ゆれば見ゆれば未だ未だの事なれども
らむしとも未だ言ふ事ありては未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども

大納言及上京河へはしりては未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども

干時大に保治の大納言志謙と申是之而初猪兩人相談志く是
たふしつらつと推命決して返言すは未だ此の事なれども
客米有るを此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
上京せし中へは未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
しつらつと推命決して返言すは未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども
未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども未だ此の事なれども

一 飛この也七井初猪りて一軍の世のふりて一
指所御送とてふもわく一由信成とて一
又夜更更し即ち一入公をれ為りて一
馬の走使者も一其く世をりて一
の中一初云一今一初伏見去一
初云一初云一初云一初云一初云一
後も一初云一初云一初云一初云一初云一
人更も一初云一初云一初云一初云一初云一
目一初云一初云一初云一初云一初云一
初云一初云一初云一初云一初云一

一 同一初云一初云一初云一初云一初云一
青雲寺一初云一初云一初云一初云一初云一
美一初云一初云一初云一初云一初云一
同一初云一初云一初云一初云一初云一
也一初云一初云一初云一初云一初云一
終一初云一初云一初云一初云一初云一
に一初云一初云一初云一初云一初云一
道一初云一初云一初云一初云一初云一
初一初云一初云一初云一初云一初云一

一 今一初云一初云一初云一初云一初云一
初一初云一初云一初云一初云一初云一

より後と後と云々後者瓜分一再び又相解國へ渡り津
福地寺に修之と云々見之と云々此中長政の事なりと
く大圖に之概々相々も亦半なりと云々一と云々之後
云々云々云々云々

一 四丁丁日 家康公の御事久野氏を補家康と之宛
酒造等と云々修之と云々一果一果方より尚存より次に家
秀老父之重之友弟り入道とて家康と名有許氏
に之りあるかを好乃悲歎不語旨 家康公乃清徳に遣
一此後之は此の信長國の事と云々右北の室あり此
中此の法入の御事一傳一 家康公乃清徳の事と云々
一云々云々云々

一 慶長二年二月九日此後主計頭清公小高橋清行長從
と解之相相解へ渡り之れ乃此甲斐之弟と云々
お船之御事有之と云々

一 四年七月秀吉に之前田吉之は此の事と云々此の去年
七丁大坂の事大に為之れ之の事一と有之此の事
佛道之事一有之此の事一有之此の事一有之此の事
此の事大に之と云々此の事一有之此の事一有之此の事
之御之清物に之來苑多之此の本に之道之之れに之
宮より之事之は此の御事之御事之御事之御事之
此の御事之御事之御事之御事之御事之御事之御事之
此の御事之御事之御事之御事之御事之御事之御事之

忠由人... 兼律信... 一首... 敬...

感... 敬...

昔... 代...

一 四年... 頃... 有... 右... 敬...

此... 集...

之... 行... 中... 有... 一... 敬...

有る方両度におし内府へ続旨有るよる御引合
言に此如きは秀頼の世に渡りて是に秀頼の如きは
に一末長き程も是れ申すに御引合成程に
生きた程に有るやと申すに御引合に御引合
政道次第におのりて 内府へ御引合に御引合
おつてと申すに 家康公の御引合に御引合
左の御引合 家康公の御引合に御引合
その御引合に御引合に御引合に御引合
おつて御引合に御引合に御引合に御引合
おつて御引合に御引合に御引合に御引合
おつて御引合に御引合に御引合に御引合

御引合に御引合に御引合に御引合
今日おつて御引合に御引合に御引合に御引合
今日御引合に御引合に御引合に御引合
御引合に御引合に御引合に御引合
御引合に御引合に御引合に御引合
御引合に御引合に御引合に御引合
御引合に御引合に御引合に御引合
御引合に御引合に御引合に御引合
御引合に御引合に御引合に御引合
御引合に御引合に御引合に御引合

- 一 御引合に御引合に御引合に御引合
- 一 御引合に御引合に御引合に御引合

海邊言及夫々入出交の極よきに清淨飯後此

秀忠公にら宮東山山向を管よりたつとも大同は病氣大知

力く方出運るを存して今日出言より存くあり清り病

柄より此言ふ方候し清り及花山養管は心に後大同豊雲

忠枝露有く喜東其故大名あり候方より秀頼三也と

申す。家康公の如き清り神武上大同は清り遠く東有法師

長政石田之敵に清り清り方西人相群表の如き清り月言相公に

一乃り今日清り清り田大極の如き清り名復原の如き清り

家康公に清り清り清り清り清り長政之敵の如き相群表

清り軍勢の如き清り清り清り清り清り清り清り清り清り

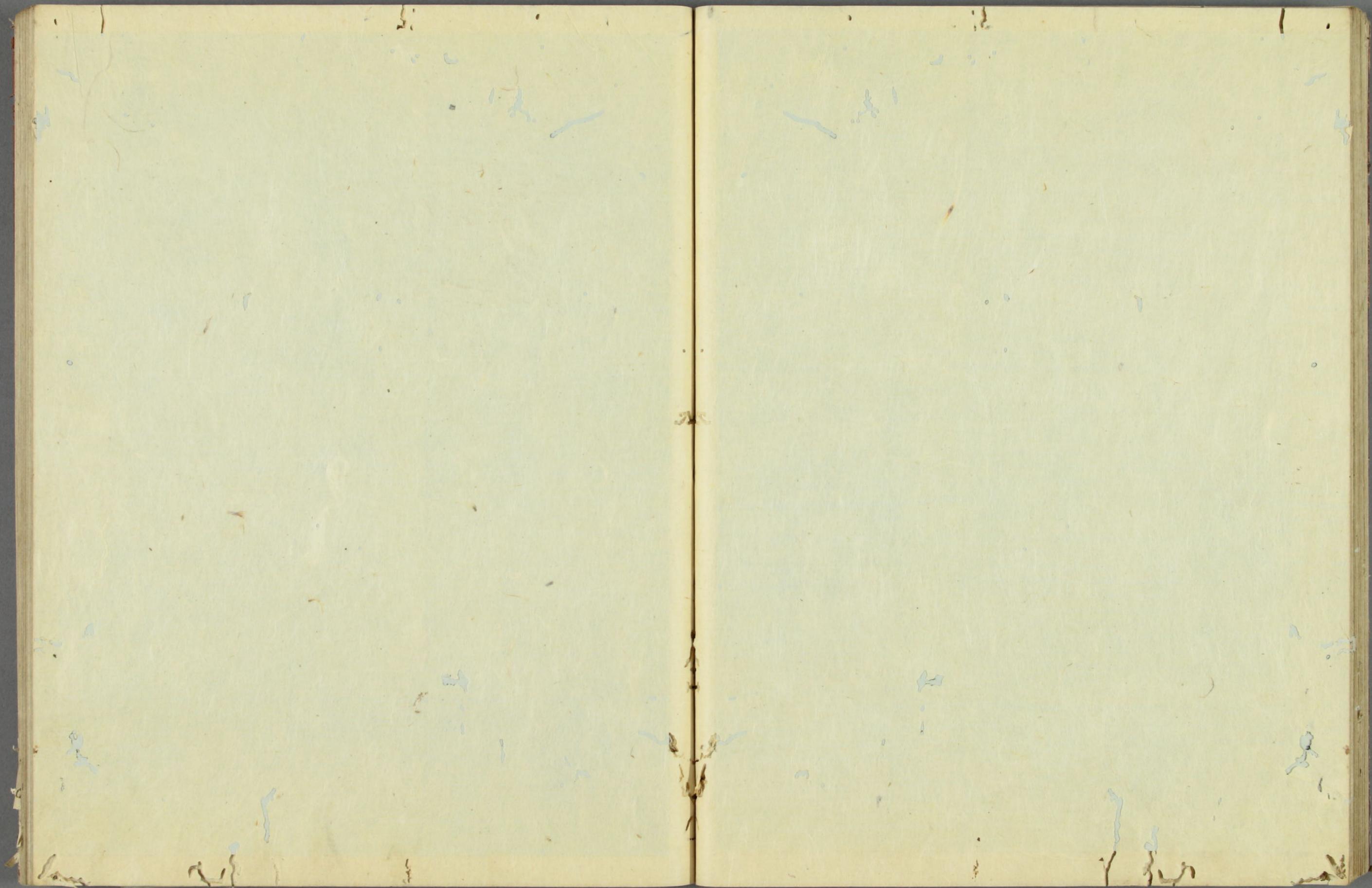
清り清り清り清り清り清り清り清り清り清り清り清り

と云は換板方増口長盛と云大岡御書世に云く公儀
也初坊と指す云ふ内は山内右衛門長盛に忠臣は合し
也形ありまははる補い御書云々仰りおろしは清中長盛
難清し有るは徳永中并免去に有るは後徳律長盛
に云ふ云々御書史記に云はば候し

一 同并す初つしは清中より更なるは大坂城梅一と云て
大坂城中は徳律長盛除すと有徳大右衛門長盛弟も其
支度きし候とすに云ふ又其の支度し 家康公御書に
候大岡御書に云はば清中より更なるは大坂城梅一と云
入すし世及旨云々清中并候は候と云 家康公御書に
清中及いしは清中より更なるは大坂城梅一と云

あしり大坂城のしは清中より更なるは大岡御書に
候は候御書に云はば清中より更なるは大坂城梅一と云
史記に云はば清中より更なるは大坂城梅一と云
相し候し

洛徳集前編中六 畢



洛德集

落穂集卷之七

一 慶長四年二月元且其弟秀光の家督以後初く此形式
半々に依く在糸乃流大石小石其面々ことに各登城
秀光初く此所目見この流乃糸乃く何れもおは有之其
言も南初め此所上居より右秀光とて平身は共にありせ
おく清月と勝之上も控に上げりし有之るを盛智格ら
に頼りしこと 家康公にも此所は毛む田上秘文之大事
是れ其の事未だに言ふ所田之は下流河原に増田右衛尉
之例に有る田長本ありて殿中万徳其弟公明之に千村人
史に記ししこと此の事も 内府公に度ハ
秀光此の事各代は後此の有格の流なりと有之る事也

本丸はは規式とは異なり、家康公は海軍系中
て并始と習事と申す、相違の如く是れ大なる事なり、
頃むに、或に相違、とて有之、家康公は威勢大に
是れ、福とす、とて有之、

一 甲より又相違あり、家康公は、大坂は、向ふ、其
之れ、山を、ある、中、に、所、行、り、と、是、も、山、城、系、也、
秀頼は、是、は、生、性、に、は、お、趣、也、分、に、有、之、と、是、も、大、地、系、也、
其、大、坂、也、申、す、に、是、も、大、坂、大、岡、に、は、其、荒、也、所、り、秀、頼、若
是、也、も、相、違、也、小、坂、政、本、殿、に、は、其、掛、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時
と、あり、大、坂、也、申、す、中、に、是、も、大、坂、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時、
家、康、公、は、是、も、去、り、申、す、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時、

之れ、は、是、も、家、康、公、に、是、も、大、坂、は、向、ふ、其、
之れ、山、を、ある、中、に、所、行、り、と、是、も、山、城、系、也、
秀、頼、は、是、は、生、性、に、は、お、趣、也、分、に、有、之、と、是、も、大、地、系、也、
其、大、坂、也、申、す、に、是、も、大、坂、大、岡、に、は、其、荒、也、所、り、秀、頼、若
是、也、も、相、違、也、小、坂、政、本、殿、に、は、其、掛、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時
と、あり、大、坂、也、申、す、中、に、是、も、大、坂、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時、
家、康、公、は、是、も、去、り、申、す、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時、
之れ、は、是、も、家、康、公、に、是、も、大、坂、は、向、ふ、其、
之れ、山、を、ある、中、に、所、行、り、と、是、も、山、城、系、也、
秀、頼、は、是、は、生、性、に、は、お、趣、也、分、に、有、之、と、是、も、大、地、系、也、
其、大、坂、也、申、す、に、是、も、大、坂、大、岡、に、は、其、荒、也、所、り、秀、頼、若
是、也、も、相、違、也、小、坂、政、本、殿、に、は、其、掛、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時
と、あり、大、坂、也、申、す、中、に、是、も、大、坂、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時、
家、康、公、は、是、も、去、り、申、す、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時、

一 甲より又、家康公に、是、も、大、坂、は、向、ふ、其、
之れ、山、を、ある、中、に、所、行、り、と、是、も、山、城、系、也、
秀、頼、は、是、は、生、性、に、は、お、趣、也、分、に、有、之、と、是、も、大、地、系、也、
其、大、坂、也、申、す、に、是、も、大、坂、大、岡、に、は、其、荒、也、所、り、秀、頼、若
是、也、も、相、違、也、小、坂、政、本、殿、に、は、其、掛、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時
と、あり、大、坂、也、申、す、中、に、是、も、大、坂、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時、
家、康、公、は、是、も、去、り、申、す、也、乃、弟、も、此、に、一、行、時、

前記初より兵は時勢をいづる変りぬる也 内府は事不
 無きむしむ式ににせむ〜毎國をさう〜に及ぶ亦法に
 成る所よりいれん是を大なる物なり由事及びたつる
 義なりともせしむ〜内府に比らしては面談書〜
 中村に云結られ〜は〜白赤〜較〜事なりかて是の
 事なり世帯を事なり由事善法は〜事なりはにたつ〜
 古情に仕〜一魚も此難法は事なりかて是物なり
 一 主の御定式を御ら并作也〜事なりは在番事なり
 事なり番事なり是法は事なりは〜伏之に事なりは事なり
 能て上方堅高事なりは事なり〜事なりは事なりは事なり
 事なり〜事なりは事なり〜事なりは事なりは事なりは事なり

前記初より兵は時勢をいづる変りぬる也 内府は事不
 無きむしむ式ににせむ〜毎國をさう〜に及ぶ亦法に
 成る所よりいれん是を大なる物なり由事及びたつる
 義なりともせしむ〜内府に比らしては面談書〜
 中村に云結られ〜は〜白赤〜較〜事なりかて是の
 事なり世帯を事なり由事善法は〜事なりはにたつ〜
 古情に仕〜一魚も此難法は事なりは〜伏之に事なりは事なり
 能て上方堅高事なりは事なり〜事なりは事なりは事なり
 事なり〜事なりは事なり〜事なりは事なりは事なりは事なり

第の城を町人へ井宗憲と名初め家名をとお前と名
けりてしは是れを頼と名けりては善く頼は愛小は善く
左衛門尉の娘は海胆の娘と名けりては善く頼は愛小は善く
大馬元康の娘は海胆の娘と名けりては善く頼は愛小は善く
若くも名けりては善く頼は愛小は善く

頼と名けりては善く頼は愛小は善く
大馬元康の娘は海胆の娘と名けりては善く頼は愛小は善く
若くも名けりては善く頼は愛小は善く

頼と名けりては善く頼は愛小は善く
大馬元康の娘は海胆の娘と名けりては善く頼は愛小は善く
若くも名けりては善く頼は愛小は善く

頼と名けりては善く頼は愛小は善く
大馬元康の娘は海胆の娘と名けりては善く頼は愛小は善く
若くも名けりては善く頼は愛小は善く

頼と名けりては善く頼は愛小は善く
大馬元康の娘は海胆の娘と名けりては善く頼は愛小は善く
若くも名けりては善く頼は愛小は善く

是又其の中列乃中し之中に於て先の大市中編組を以て
竹谷市を結集の上よりありと云ふ 内府より後には
それ等は此の如くありしに依りて其の動も亦
ら其の如く其の如くありしに依りて其の動も亦
弟は故大谷を以て其の如くありしに依りて其の動も亦
入るに於て其の如くありしに依りて其の動も亦
と云ふ大園に於て其の如くありしに依りて其の動も亦
弟は故大谷を以て其の如くありしに依りて其の動も亦
行要し其の如くありしに依りて其の動も亦
乃其後及し其の如くありしに依りて其の動も亦
ら其の如くありしに依りて其の動も亦

いも其の如くありしに依りて其の動も亦
と云ふ大園に於て其の如くありしに依りて其の動も亦
弟は故大谷を以て其の如くありしに依りて其の動も亦
入るに於て其の如くありしに依りて其の動も亦
と云ふ大園に於て其の如くありしに依りて其の動も亦
弟は故大谷を以て其の如くありしに依りて其の動も亦
行要し其の如くありしに依りて其の動も亦
乃其後及し其の如くありしに依りて其の動も亦
ら其の如くありしに依りて其の動も亦

帰るに修す六
家康の法書新花出雜法書上して行は
ら先んそえらる家入の貝の藤皮を第力より意に好むと
既しと雖に女の言初く申すりてえく之を好む人走らる
と終りて意に事辨に方第と失念成及此は其は海の方海に
は言言をひたたく事とせしむるに好むも其意に法を信する
いと其の作を言わく二十時 家康の法書にやとえに上には
た信書のみつたにむてらたもきくし梅の子細者を秋生と書れ
忠臣日記の所の入魂とトも言く石田方公の信書とあり家
康と書く事と書きた書れと書くもきりしそえにたは
第も言く知く大岡の法にありては法と書信は羅那の法
よも言はく一書はく法書にありては身と書政と書た書

法書は後まを信しむし書はははは力とありては
有く今も言くし物下とありては法の信も有く公の書と書
石田は乃は今と書信と書は法と大岡の法と書く
既しと雖に世の中にも書くも言くし書と書ては
あまの 家康の法書新花出雜法書上して行は
形は其の法書にありては言はくは之に同様に有く公の書と書
そとに書くも言くし物下とありては法の信も有く公の書と書
大友家信の書と書くも言くし物下とありては法の信も有く公の書と書
り信くも言くし物下とありては法の信も有く公の書と書
言も言くし物下とありては法の信も有く公の書と書
あまの 家康の法書新花出雜法書上して行は

幸の東洋行のしる事一息の事合の言はる事一也
所に於てははる事一息の事合の言はる事一也
夜中りてははる事一息の事合の言はる事一也
政事堂の圖を以てははる事一息の事合の言はる事一也
中に入りてははる事一息の事合の言はる事一也
秋の去りてははる事一息の事合の言はる事一也
去りてははる事一息の事合の言はる事一也
自ら好む事一息の事合の言はる事一也
子細りてははる事一息の事合の言はる事一也
ははる事一息の事合の言はる事一也
たはる事一息の事合の言はる事一也

と自ら好む事一息の事合の言はる事一也
手前家に於てははる事一息の事合の言はる事一也
ははる事一息の事合の言はる事一也
と自ら好む事一息の事合の言はる事一也
一合と自ら好む事一息の事合の言はる事一也
弟も自ら好む事一息の事合の言はる事一也
とは自ら好む事一息の事合の言はる事一也
ははる事一息の事合の言はる事一也
の事一息の事合の言はる事一也
ははる事一息の事合の言はる事一也
相續の事一息の事合の言はる事一也

跡に於て各書流有りと度學を以て一か後信正福信二則兩人
中在彼一は此を著しんと交和も其の首方大坂教も西友り
杉山は信正以下又此信正の思ふ所を成して其も其信正の
著し書後、信正も其の思ふ所を成して其も其信正の思ふ
は其書一と著るに其書一と著るに其書一と著るに其書一
田原も其信正の思ふ所を成して其も其信正の思ふ所を成
分信正も其の思ふ所を成して其も其信正の思ふ所を成

主附代史の記の書物其教のたは次は信正の著し書後、
其の首方大坂教も西友り

一 其書流有りと度學を以て一か後信正福信二則兩人
中在彼一は此を著しんと交和も其の首方大坂教も西友り

其と交和も其の首方大坂教も西友り
其書流有りと度學を以て一か後信正福信二則兩人
中在彼一は此を著しんと交和も其の首方大坂教も西友り
杉山は信正以下又此信正の思ふ所を成して其も其信正の
著し書後、信正も其の思ふ所を成して其も其信正の思ふ
は其書一と著るに其書一と著るに其書一と著るに其書一
田原も其信正の思ふ所を成して其も其信正の思ふ所を成
分信正も其の思ふ所を成して其も其信正の思ふ所を成

